

昭和34年平城宮跡第2次発掘調査概要

建造物研究室・建築
歴史研究室・考古

特別史跡「平城宮跡」の第2次発掘調査を昭和34年7月21日から12月15日までの148日間にわたって実施した。本回の調査地域は、通称一条道の北側、佐紀池の東側にあたり、関野貞博士推定による内裏の西北隅をしめる一劃で、調査面積は約30アールに達した。

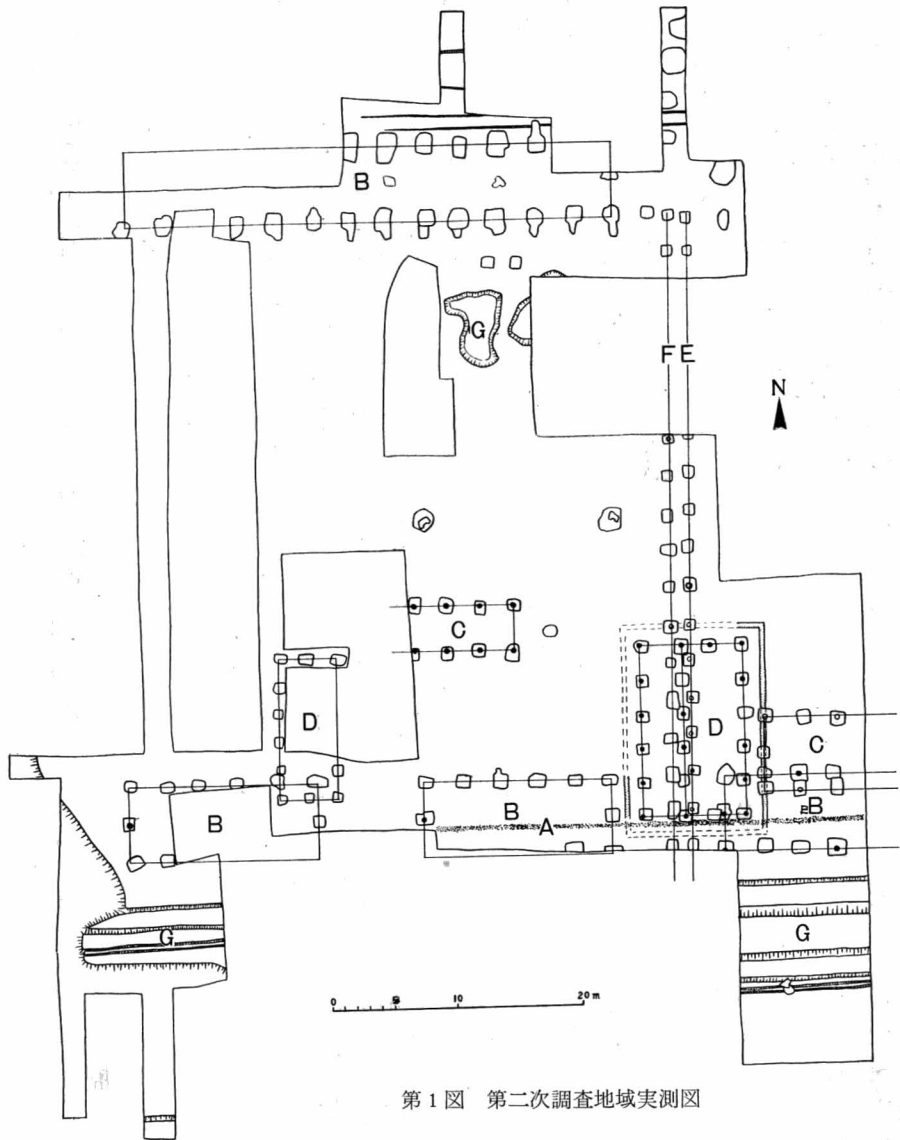
調査の結果、堀立柱式の建物の遺構が重なりあつて検出され、それらの建物が造営された時期の先後の決定には非常な困難を伴なつたが、少くとも7回以上にわたつてこの地域に造営が行われたことを知り得た。かりにそれらをA—G群として区別し、記述する。

A群——この地域の原地形は沼状の湿地帯だつたらしく、それを埋立てさらに1m以上の土盛りを行つたのがこの地域の最初の造営である。この土盛りと共に造られたと推察される建物の遺構はなんら判明せず、ただ発掘地南端にコブシ大の礫を巾約60cmにならべた石敷が東西に走るのが認められた。この石敷は一見雨落溝の如き形態だが、これをさかいに当時の地表が南で低く、北ではさらに高かつたと考えられる点があり、のちに北方の地域が削平され、そのためA群時期の他の遺構が残らなかつたものと解される。このことは同時に、この石敷が何らかの南北の境界の役目を果たしていたことを推測させる。

B群——A群の石敷の北側を削平して全体をならし、堀立柱の建物

が建てられた。建物は石敷をまたいで東西に3棟建ちならび、それに平行して北約45mのところを東西に長い1棟の建物がある。南の3棟は同一規模のもので、東西5間、南北2間（柱間各約3m—天平尺10尺以下同様）、各建物はほぼ9mの間隔をおいている。東端の建物は桁行3間分を確認したのみで、以東は調査地域外に延びている。この3棟に平行する北の建物は東西13間、南北2間（柱間各約3m—10尺）のもので、3間ごとに間仕切があつたらしい。側柱は堀立柱だが、妻柱と間仕切中央柱は根固石様の石を伴つた浅い掘りこみによるものであることが注意された。この北の建物は南の3棟のうち西2棟のほぼ真北に平行して対置する形勢を示し、その間は広い空地であつたとおもわれる。この南北の4建物を一群としたのは、このような平行性や柱間寸法の一致によつたのである。このB群建物が東へどの程度連なつていくかは、今後の調査にまたねばならない。

C群——2棟の建物からなり、1棟はB群の南中央建物の北約10m、調査地域のほぼ中央に位置し、東西3間（柱間各約2.7m—9尺）以上、南北1間（柱間約3.6m—12尺）のものである。他の1棟はB群南東建物に一部重なり、その北に検出されたもので、東西2間以上、南北2間（柱間各約3.0m—9尺）で、東限は調査地域外にある。この2棟は、



第1図 第二次調査地域実測図

B群以外の東西に長い建物として一括した。

D群——今回の調査地域内で始めて南北に長い建物であらわれる時期である。2棟の建物からなり、1棟はB群南西建物と一部重複してその北に検出されたもので、南北5間東西2間(柱間各約2.3m—7.5—尺)である。これに平行して西約2.4mにある他の1棟は、東西2間(柱間各約2.4m—8尺)、南北5間(柱間各約2.7m—9尺)の身舎の西に柱間3m—10尺の廂がつき、側柱列の外約1.3mのところの中約0.4mの雨落溝がめぐった建物である。どちらも掘立柱で、雨落溝も特別の構造はない。

E群——D群建物廃絶後、その東方建物中央附近に南北にならんだ掘立柱掘方を伴う造営が行われた。この柱列の柱間は各約3m—10尺で、調査地域内に14本確認、総延長約48mにおよび、全調査地



第2図 B 群 東 建 物

域を東西に分割する形勢を示している。堀又は柵の如きものの遺構であろうか。

こののちに、全地域にわたり第2回目の土盛りがおこなわれている。特に南西に厚く(約60cm)、東および北では薄い。この土盛りが行われ

たのは、原地形が南西に下つていたことからおして、第1次土盛り以後かなりの地盤沈下があったためではなからうか。

この第2次土盛り工事以後に2群の遺構があるが、その間に時間的前後関係があつたかどうかは確認できなかった。

F群——**E群**の柱列の西約1.6mに平行してな

らぶ同様な掘立柱列の遺構であり、同じ性格のものと考えられる。第2次土盛り工事直後も、その直前とほぼ同じ状況だったと推測される。**G群**——現在の一条通に平行して、第2次の盛土に掘り開いた2列の溝とその間が土塁状を呈する遺構がある。溝は部分によつて異なるが、中約1.5m、深さ約0.6m程度、土塁状の部分の中は約3.5mである。おそらく東西に走る築地とその両側の溝の遺構であろう。またその南の溝の下に花崗岩の礎石が2個埋没されており、礎石を用いた建物がこの附近にあつたと考えられる。

この遺構と



第3図 B 群 北 建 物



第4図 G 群 土 器 溜 り

のぼる。さらに調査地域のほぼ中央付近で、2個の凝灰岩が発見された。どちらも第2次土盛り後それに掘りこんだ土坑中におちこんだ状態で発見され、ともに約55cm四方で一辺にえぐりがあり、両者をあわせると中央に六角形の穴が形成される。

ほぼ同時期と遺物から推定される特殊遺構がある。それは調査地域の中央北よりにある東西約4m、南北約5m、深さ約0.5mの隋円形の坑で、第2次盛土に掘りこまれていた。そのなかには一時埋没された状態で、主として供膳形態の土師器が発見された。その器形の種類は限られ、総数は約2千個体に

以上のような遺構にもなつた遺物としては、瓦類は平城宮跡の他の部分と比較して発掘面積の割合には少なく、他に第2次の盛土中から万年通宝2枚、神功開宝9枚、不明1枚計12枚が一連につきあわされた状態で発見された。これは第2次土盛工事実施時期の上限を示している。遺物の大部分をしめるG群出土の土器は、出土状況が特異であるとともに、ほとんどが供膳形態でしかも器形の変化が少なく多数であり、整理後には当時の宮廷生活の一部を考えしめる資料となるであろう。またその絶対年代も比較的短期間に限定され、土器編年研究上にも重要な手掛りとなる。

以上が本回の調査結果の概要だが、通観すると、この地域が平城宮の中央地区の北部に位置し、その一劃を南北に区切る一つの境界線に近かつたこと、その境界線以北においてもA—G群にみられた多数回の造営工事の行われたことが知られた。このように遺構を個々別々のみでなく、組合せの形で、平城宮全体との関連のうちでわずかも把握し得たこと、それらを時間的な結びつきから考察し得たこと、これが本回の調査の一つの成果であつたといえよう。これは約30アールという大面積を掘時に発掘したことによつてはじめてなし得たことである。しかし、これらの一群の遺構が平城宮全体においてはたしていったより具体的な役割については何らの手掛りも得られなかつた。今回の発掘調査が過去の遺跡調査の常識からすれば、大規模だが、平城宮跡全体からすればわずかにその1/300の面積にしかおよばないことを考えると、それも止むを得ざるところで、さらに大規模な今後の調査をまつて、はじめて解明される問題であろう。

(田中 琢)